

書物とのスキンシップ

短期大学部講師 須川 妙子



学部、院浪、院生時代と足掛け7年もの間、さる女子大学に在籍し、「花の女子大生」を謳歌した。近隣には超有名国立大学、お坊ちやまぞろいの有名私立大学が多数あり、時代はバブル期の絶頂期……

このシュチュエーションから想像されるのは、絵に描いたような艶やかな女子学生ライフ……。たぶん、華やかなこともいっぱいあったのだろう。しかし、卒業して十数年経ったいま、学生時代はどうだった？と問われれば、図書館書庫のひんやりとした空気と、ちょっとかび臭い匂い……という、かなり地味な印象が懐かしい感覚として真っ先に思い出される。

院生になったとき、研究室の先輩からある言葉が贈られた。

「書物とのスキンシップを忘れずに」

書物は必ず手に取りなさい。撫でてあげなさい。じっくり読まなくてもいいから、とにかくページをめくりなさい、ということだった。

以下はその先輩の長い講釈の要点である。院生時代は人生の中で最も学問している、そして最も食欲に吸収する力をもてる時期だ、そのためたくさんの書物に触れる必要がある。ただ、全て真面目に読み込もうとすると息切れしてしまう、時間も足りない、だから出来るだけたくさんの書物に触れて書物の重さや紙の手触り、バラバラめくった時に目に付いた言葉、ふと感じられた著者の思いなどを「感覚」として印象付けておきなさい。そうすれば、その書物の内容が本当に必要になったとき、「ああ、そういえば、あの辺りに、あんな本があったなあ。」と思い出す、一度撫でておくと『その書物が呼んでくれる。』ということだった。

その先輩の不思議な言葉を鵜呑みにしたわけではなかったが、図書館の本に触りまくった。単にめぼしい書物が見つけられずに、闇雲に手にとっていたのかもしれないが、かび臭くて、ひんやりとした、うす暗い書庫に入り込んで、「貴重書」といわれるたいそう古めかしいぼろぼろの古文書にもこっそり触った。ちょっと角が欠けたけど黙っておいた。

修士1年が終わろうとしている頃、どうしても確証が見出せない課題にぶつかった。当時、あの不思議な言葉を残してイギリスへ留学していた先輩にお手紙を書いた。お返事がすぐに来た。「第2書庫の奥の方に、表紙が朱色でザラツとした布張りの、ぺらぺらだけど価値の高そうな本があるよ。題名知らないけど、たしかそれに関係することが載ってたような気がする」と。載っていました。おかげで修士論文への突破口が開けました。

ああ、この感覚なのかと実感できた。必死になって1冊の本を読んでいるだけでは、視野が広がらない。チラッと捲っておくだけ、撫でておくだけで書物の印象が「感覚」として体に残る。心を落ち着けて感覚を研ぎ澄ませると、その時に必要な書物の印象がよみがえってくるのだと。目を三角にして文献を探し出そうとしていた姿勢を改め、図書館の中をぶらぶらしながら書物に触れて、以前にその書物で得た感覚を呼び起こすようになった。面白いほどに、必要な書物が探し出せるようになった。全て一度撫でてあげた書物ばかりだった。書物を手に取り開く瞬間の、ちょっとかび臭い匂いを感じると、懐かしい人に逢えたような感覚になっていった。そして、先輩と同じ言葉を、後輩に伝えている先輩面した私がいた。

今でも図書館書庫にはぶらぶら出かけていく。専門外の分野でもなんとなく触ってくる。インターネットで情報を簡単に手に入れられる時代に、のろまなことをやっているかもしれないが、「書物とスキンシップ」することの喜びは、パソコンを通しての楽しみとは一味違うもの。学生諸君にもぜひこの喜びを若いうちに実感して欲しいと願っています。そして、学生時代を思いかえす時に、華やかだったことよりも、心の奥底に根付いている「感覚」がじんわりと湧き上がってくるような、そんな学生生活を過ごしてください。

